

タマンシスワ教育理念の連続性と不連続性

西 村 重 夫*

The Transformation of Tamansiswa's Principles

Shigeo NISHIMURA*

Since its founding in 1922 by Ki Hajar Dewantara, the Tamansiswa school has often faced difficulties that threatened its continuation. This article aims to clarify how and why Tamansiswa kept its principles and sometimes revised them in order to overcome its difficulties. When the colonial government issued the so-called Wild Schools Ordinance in 1932, placing restrictions on educational activities, Tamansiswa took a leading role in the struggle to abolish the ordinance. In its struggle Tamansiswa used the principle of non-cooperation with the colonial government. After Indonesian independence, this principle was reversed to one of cooperation with Indonesian government. The new principles of Tamansiswa (*Pancadarma*) were formulated in order to correspond with Pancasila, the philosophical basis for the foundation of Indonesia. After the Coup of September 30, 1965, Tamansiswa was criticized because it was considered to lack the religious principle. Tamansiswa did not revise its principles, however, but explained that the principle of the natural law (*kodrat alam*) of *Pancadarma* was connected with the first principle of Pancasila, that is, belief in the One and Only God, because natural law was created by the God.

は じ め に

本論は、土屋健治のタマンシスワに関する一連の研究を検討しながら、タマンシスワの教育理念がどのように変容したかについて考察するものである。土屋は、タマンシスワを今世紀初頭から展開されるインドネシア民族主義運動の中に位置づけ、タマンシスワの発展過程を考察することによって、民主主義、指導性、英知 (*kebijaksanaan*, クビジャクサナアン) など、インドネシアの民族主義を解明する鍵となる概念を究明した。これらの概念は、インドネシア共和国の国是であるパンチャシラ (*Pancasila*) で用いられるなど、現代インドネシアの正統性に深くかかわる理念となっている。本論では、タマンシスワの教育理念そのものに焦点をあて、その連続性と不連続性を明らかにすることによって、インドネシア現代教育史におけるタマン

* 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

シスワの位置づけを考究したい。

タマンシスワは、1922年、キ・ハジャル・デワントロ (Ki Hajar Dewantara) によってジョジャカルタの地に設立された私立の教育機関である。タマンシスワには創設以来、その存続すら危うくする大きな時代の変化に見舞われた。本論で取りあげる三つの変化は、インドネシア現代史の岐路であるばかりでなく、タマンシスワ発展史において重大な意味をもつものである。第一は、1932年、オランダ植民地政府による私学校を規制しようとした条令の問題である。民族主義に根ざすタマンシスワは、他の民族主義団体と力をあわせて私学校条令を撤廃する運動を展開した。第二は、1945年、インドネシア民族の悲願であった独立である。インドネシア共和国の成立によって、タマンシスワは、オランダ植民地時代に唱えた設立原理に変更を加えざるをえなくなった。第三は、1965年、スカルノからスハルトへの政権委譲の契機となった「9月30日事件」である。容共体制から反共体制への一大転換がとげられる中で、タマンシスワは、生き残りをかけた対応を模索した。

以上三つの時点において、タマンシスワの教育理念にどのような変化が生じたのか否かを明らかにするのが本研究の主題である。その際、比較の手法を取り入れることにする。第一については、デワントロの生き方としてのパンディット (pandita) とクシャトリア (kesatria) の比較である。パンディットは賢者、精神の師、クシャトリアは勇士、武人を意味する。タマンシスワを創設したデワントロが私学校条令の撤廃運動を闘うために、パンディットの道を選んだのか、それともクシャトリアの道を選んだのかというのが論点となる。第二については、タマンシスワの設立時に出されたタマンシスワ7原則 (1922年原則) とインドネシア独立後に出されたパンチャダルマ (Pancadarma, 1947年原則) を比較する。独立によって、タマンシスワの教育原理にいかなる変化が生まれたのかを考察する。第三については、インドネシアの建国五原則パンチャシラとパンチャダルマ (1947年原則) の比較である。国家体制の一大転換に対応するために、タマンシスワは、その原則であるパンチャダルマをパンチャシラにいかに整合させたのかを検討する。

I パンディットとクシャトリア

インドネシアでは、国家英雄 (Pahlawan Nasional) が大統領布告によって定められている。タマンシスワの創設者キ・ハジャル・デワントロは、彼が死去した1959年に大統領布告305号によって国家英雄に選出されている [Team Penyusun Bahtera Jaya 1985: 39]。

ところで、英雄という言葉は、才知にすぐれた人をあらわす「英」と武勇にすぐれた人をあらわす「雄」からなる。デワントロが考案し、タウヒド (Mohamad Tauchid) や土屋が引用した二分法によれば、一方で文の才にまさった「英」たるパンディットがあり、他方で武の才に

まさった「雄」たるクシャトリアがある。パンディットがアスラマやポンドックなどの寄宿塾の主宰者として、宗教や宇宙の秘蹟を開示したと考えられるのに対し、クシャトリアは、王国の中枢にあって闘いに出ていく者をさす。したがって、クシャトリアが政治世界の徒であり、パンディットは非政治世界の徒であるといえよう〔土屋 1982: 240〕。

デワントロと同じジョクジャカルタ出身の国家英雄について考えると、クシャトリア的な国家英雄としては、オランダ植民地時代にオランダに対する戦争を繰り広げた人物像があげられる。そこには、初の対オランダ戦争を敢行したマタラム国王のスルタン・アグン (Sultan Agung)、ジャワ戦争の指導者ディボヌゴロ (Diponegoro)、ジャワ戦争に参加した女性戦士ニ・アグン・セラシ (Nyi Ageng Serang) といった名が連なる。

一方、パンディット的な国家英雄としては、20 世紀にはいって民族運動を展開させた人物像があげられる。民族主義運動の先覚者ワヒディン・スディロフソジョ (Wahidin Sudirohusodo) は、ブディ・ウトモ (Budi Utomo) の結成を促した。ブディ・ウトモは、1908 年に設立されたインドネシアで最初の民族主義団体で、教育や産業の振興を通じた原住民社会の調和ある発展を目標として掲げた。アフマド・ダフラン (K. H. Ahmad Dahlan) は、イスラーム改革運動団体であるムハマディヤ (Muhammadiyah) の創立者である。ブディ・ウトモにも参画したダフランは、1912 年にムハマディヤを創設すると、学校制度を取り入れたマドゥラサ (madrasah) や婦人組織アイシア (Aisyiah) など、ムハマディヤ運動の原型をつくった。アイシアを主宰したダフラン夫人のニ・アフマド・ダフラン (Nyi Ahmad Dahlan) やムハマディヤ運動に参加し、ハジ援助団体を創設したファハルディン (K. H. Fahrudin) もまた、パンディット的な国家英雄の範疇にはいる。

上記の二分法に基づく、キ・ハジャル・デワントロは、パンディットなのか、クシャトリアなのか。教育組織タマンシスワを創設したという意味からすれば、ワヒディンやダフランなどと同じように、パンディットの系譜に連なると考えることが妥当であろう。しかし、デワントロが生涯をかけて民族闘争を展開するなかにおいて、パンディットであると同時にクシャトリアとしての闘いがあったことは、タウヒドや土屋が指摘するとおりである。ここでは、クシャトリアからパンディットへの転換、その逆であるクシャトリアからパンディットへの転換という二つの面をみることにする。

第一の面は、デワントロのタマンシスワ設立とキ・ハジャル・デワントロへの改名において象徴的に示される。パク・アラム家のパンゲラン・スルヤニングラット (Pangeran Soerjaningrat) の次男として 1889 年 5 月 2 日に生まれたデワントロは、ラデン・マス・スワルディ・スルヤニングラット (Raden Mas Soewardi Soerjaningrat) と命名された。ラデンもマスも貴族の称号である。医学校を中退し、ジャーナリストになったスワルディは、1913 年、オランダ解放百周年の記念式典に寄せて「もし私がオランダ人であったならば」(Als Ik eens Neder-

lander was,...) という論文を発表した [土屋 1982: 503-508]。もし私がオランダ人であったならば、いまだオランダの植民地支配下にあり、民族の解放がなされていないインドネシア人に対して、オランダの独立を祝うようにすすめるような見苦しいことはしないだろう。上記の趣意の論文は、オランダ植民地政府を刺激し、スワルディは、国外追放の処分を受けた。オランダで追放生活を送った6年間にスワルディは、政治問題のほか文化問題に関心を抱くようになった。1919年に帰国したあとも、スワルディは政治運動を継続したが、オランダ政府の民族運動に対する態度がますます硬化するにつれて、民族闘争を有効に展開させるため、政治の世界から退いて、教育の世界に入るようになった。1922年のタマンシスワ創設がそのことを如実にあらわすが、ここに、スワルディのクシャトリアとしての生き方からパンディットへの移行を認めることができる。

1928年5月2日、数え年で40歳の誕生日を迎えたスワルディは、ラデン・マスという貴族の称号を名のることをやめると同時に、これまでの名を改め、キ・ハジャル・デワントロと称するようになった。キは、宗教塾であるプサントレンの主宰者を称するキヤイ (kiyai) を意味する。ハジャルはアジャル (ajar) であり、塾を意味するアスラマやボンドックの教師をさし、デワントロは、神であるデワ (dewa) の仲立ちをする者を意味する。要するに、キ・ハジャル・デワントロとは、神を仲立ちにする師をあらわし、まさしくパンディットとしての自己規定がなされることとなった。

ところで、タウヒドや土屋は、このような単純な二分法を回避している。タマンシスワの設立や改名がクシャトリアからパンディットへの転機であることを認めつつ、両者が分離しているのではなく、デワントロの中で融合している点に配慮している。「サトリア＝ピナンディット (パンディットの精神を有するクシャトリア)」(satrio-pinandito) から「パンディット＝シナトリオ (民族と人民を護るために武器をもって闘う備えをしているパンディット, グル)」(pandito-sinatrio) への変転と意味づけているのである [Tauchid 1968: 19; 土屋 1982: 151]。

第二の面、すなわち、パンディットからクシャトリアへの転換は、私学校条令撤廃運動の中に認めることができる。

私学校条令とは、1932年9月に公布された「1932年第494号条令」のことであり、正式には「私教育監督条令」(Toezicht Ordennantie Particulier Onderwijs) と称される。私学校とは、中国人学校のほか、民族主義運動の展開にともなって1920年代以降次々と誕生した学校をさし、条令の趣旨は、そうした私学校をオランダ植民地政府の監督下におくことにあった。具体的な条項を見ていくと、第一に、私学校は設立にあたって事前の許可を得なければならない、第二に、私学校の教師は、教員になるための許可証を取得しなければならない、第三に、教育内容は、政府の法令に反してはならず、公立学校に準じなければならないというように、学校、教師、教育内容のすべてにわたって政府の認可を必要とするようになったのである。

これに対し、タマンシスワは、機敏な対応を示した。私学校条令が公布された5日後には、デワントロがタマンシスワの最高会議を招集し、私学校条令を撤回するように政府に要求することを決めた。タマンシスワの教育のあり方が西欧型の学校とは異なるという理由が示され、教師や教育内容を一方的に規制することを非難する行動がとられた。

さらに、デワントロは、総督に対し直接電報を発信するという手段を用いてタマンシスワの強固な意志を表した。そこでは、必要な期間にわたって最大限の非暴力的抵抗を示すことによって私学校条令に反対する姿勢が訴えられた。武器を手にしない意味においてパンディト的であるが、土屋が指摘するように、基本的な姿勢は「クシャトリアとして公然と敵対の態度を表明」[土屋 1982: 411]したのである。

パンディトからクシャトリアへの転換において何よりも注目しなければならないことは、タマンシスワの私学校条令撤廃運動が多く民族主義団体の支援を集めたという事実である。タマンシスワを中核とする民族主義団体の連帯の過程は、土屋によってつまびらかに分析されている[同上書: 443-452]。それによれば、私学校条令が公布された直後の1932年10月と11月のわずか2カ月の間に、タマンシスワの私学校条令撤回運動を支援することを表明した団体は、記録に残っているものだけでも20に及んだ。

タマンシスワを核とする私学校条令撤廃運動の広がりには、いくつかの特色が認められる。第一に、タマンシスワを支援する団体は、政党、教育界、宗教界、社会団体と多彩な分野に及んだ。政党としては、インドネシアイスラーム同盟党(PSII)やインドネシア党がいち早くタマンシスワを支持し、大衆行動によって条令撤回のために闘うことを表明した。これまでタマンシスワと対立関係にあったインドネシア民族党(PBI)すら、タマンシスワとデワントロの唱える非暴力的抵抗を全面的に支持する旨の声明を出したことが注目される。宗教界としては、一方でイスラーム系の諸団体が私学校条令の撤廃運動を展開させ、他方ではカトリック系団体が反対の声明を出したことから明らかなように、宗教の壁を打破した支援の波が広がった。同じイスラーム系といっても、保守派のナフダトゥール・ウラマと改革派のムハマディヤが協調して私学校条令の撤回運動に立ち上がったことは、これまでに例のみない動きであった。

第二に、私学校条令反対運動は、地域的にも民族的にも、ジャワあるいはジャワ人の世界から外へと拡大した。教育界の動きに限ってみても、西スマトラのパダン・パンジャンに設立されていたディニア女子学校や同じ西スマトラのカユタナムに設けられていたINS学校が反対声明を発表した。ディニア女子学校はラフマ・エル・ユヌシア(Rahmah El Yunusiyyah)が1923年に設けた私立学校で、ミナンカバウの女性の近代化に大きな役割を果たした。INS学校は、モハマド・シャフェイ(Mohammad Sjafei)によって1928年に設立した私立学校で、インドネシア教育史書では、タマンシスワと並ぶ民族主義学校の位置づけを受けている。民族的な広がりの一例を挙げると、ジャワ北部のプカロンガンでインドネシア人、アラブ人、中国人

の代表が参加した三民族連合会議が開催され、条令に反対することが表明された。

第三に、タマンシスワを支援する運動は、既成の団体を連合させる契機となった。マラン市で開かれた教育条令反対委員会には、33の各種政党、団体の代表800人余りが参集した。当時東ジャワに存在していた主要な政党と団体がほとんど含まれていたと土屋は指摘している〔同上書：448〕。東ジャワのジェンベルと中ジャワのブローラでそれぞれ条令反対のための連合体が結成されたが、これもまた、タマンシスワを中心にインドネシア党、ムハマディヤ、インドネシア民族党等が結集した好例である。このような各種の政党、団体の連合体としては、1927年に結成された「インドネシア民族政治団体連合協議会」(PPPKI)がある。土屋が指摘する〔同上書：449〕ように、それが民族の統一組織としての所期の機能を果たしたのは、この私学校条令であった。タマンシスワを中核とする私学校条令反対運動の性格がそこに表れている。

私学校条令反対運動においてデワントロの姿勢がパンディトからクシャトリアへと再び転換したと述べた理由は、政治の世界から身を引いていたデワントロが再び民族主義運動を結集する役割を果たしたからである。さまざまな民族主義団体を結びつけたこの運動のなかにインドネシア独立への前奏を認めることができる。

II タマンシスワ7原則とパンチャダルマ

タマンシスワの創設以来の教育理念として、タマンシスワ原則(Azas-azas Tamansiswa)がある。これは、1922年7月に開かれたタマンシスワの開校式においてデワントロが行った演説を素材とし、1923年10月にジョクジャカルタで開催された第一回タマンシスワ大会において採択された7項目からなる原則である。ここでは、タマンシスワ7原則とインドネシア独立後に定められたパンチャダルマ(5原則)を比較することによって、タマンシスワの教育理念における連続性と不連続性を検討しようと思う。それに先立ち、タマンシスワ開校式においてデワントロが7点に整理したタマンシスワの設立趣意を概観することにする。なぜなら、デワントロの演説がタマンシスワ設立の精神として、その後変わることなく尊重されたからである。7項目の設立趣旨は、次の通りである〔Sajoga 1952: 203-204; 土屋 1982: 163-165〕。

第1は、教育の目的論である。デワントロによれば、教育は、民族が先祖から伝えられてきた文化を発展継承させる目的をもつ。この目的を達成させるための手段として、kodrat alamという概念が示された。土屋は「自然のもつ本質的な力」と訳しているが、民族と個人がそれぞれ保有する自然の力に基づく教育が第一に打ち出されている。民族の慣習、個人の個性がkodrat alamという理解である。

第2に、インドネシア人が受けている西欧型教育は、強く否定されている。植民地政策に基づく西欧型の教育は、支配者側の利益のためのものであり、個人的には卒業証書の獲得を目的

とするものであるとして非難された。

第3に、こうした植民地精神による教育は西欧への依存を生み出しているのであり、それに対して、民族的な教育を打ち出し、各人の独立精神を植えつける必要性が示された。

第4に、インドネシア民族独自の教育システムとして、アスラマ、ポンドック、プサントレンといった寄宿塾の伝統があげられ、インドネシア自身の利益を優先する新しい教育システムの確立が提案された。

第5に、欧米においても子どもの必要、関心に基づく自由な教育思想が生まれていることが示され、タマンシスワが理想とするアモン制度と合致すると述べられた。アモン (among) は、ジャワ語で「見守る」「養育する」を意味する。アモン制度は、命令や罰則、強制によるのではなく、子どもの自然に備わっている力 (kodrat alam) を導き出す教育法をさす。

第6に、インドネシア民族の教育を実施するために、束縛をともなう援助を受けてはならず、自立していかなければならないことが示された。

第7に、教育は、社会の上層部だけの専用物であってはならず、むしろ下層から始めなければならないと述べ、民主的な教育がねらいとされた。

以上7項目の教育理念を相互に関連づけて整理してみるとすれば、次のようになる。

オランダ植民地時代にあって民族主義に根ざす教育を創出しようとしたデワントロは、西欧型の教育とインドネシア民族の教育が真っ向から対立している構図を提示した。卒業証書の獲得や植民地政府の利益追求を目的とする西欧型の教育を否定する(第2項目)デワントロは、一方でジャワに伝統的な寄宿塾(ポンドック、プサントレン、アスラマ)を復活させ(第4項目)、他方で20世紀初頭の欧米に端を発した子ども中心の教育思想を受容する(第5項目)ことによって、民族の慣習と個人の個性に基づく教育を求めた。

それを実現するため、タマンシスワの教育は、自然の本質的な力の原理に基づく(第1項目)とともに、独立、自由の原理に立脚する(第3項目)ことがうたわれた。一方、教育施策としては、束縛をともなう援助を排除し(第6項目)、民主的な教育を構築する(第7項目)ことがめざされた。

こうした設立趣旨をもとに1923年の第一回タマンシスワ大会で決議されたのがタマンシスワ原則である。これについても土屋の詳しい分析がある[土屋 1982: 171-178]。

第1原則は、自然の本質的な力の原則である。教育は命令や罰則、強制によるものではなく、子どものもつ自然の力を助長するものでなければならない。タマンシスワが採択するアモン制度の本質は子どもを献身的に見守る教育をさすが、それが成立する条件の一つが自然の本質的な力の原則である。

第2原則は、自由あるいは独立の原則である。アモン制度が成立するためのもう一つの条件がこの自由の原則である。子どもが自由に思考し、行動するように導くことが教育のめざすべ

き道であるとされた。

第3原則は、文化の原則である。20世紀は「児童の世紀」とであると叫ばれ、子どもの天性や自由を尊重する新教育運動が欧米で広がり、その波はアジアにも押し寄せた。デワントロもその影響を強く受け、幼児教育理論を打ち出したモンテッソーリやインドの詩聖タゴールの教育思想を受容した。しかし、タマンシスワの教育原理は、欧米に端を発する新教育運動の模倣ではない。インドネシアの文化そのものに立脚した教育のあり方として、文化の原則が提示された。

第4原則は、民主主義の原則である。教育はすべての人を対象とするものでなければならず、教育の質の向上が教育の量的拡大を犠牲にしてはならないとされた。

第5原則は、非協力の原則である。独立を脅かすような援助や補助金を受け入れてはならず、束縛するものから身を遠ざけることが主張された。

第6原則は、自助の原則である。自らの力に依拠する態度が示され、そのためには、質素に生活すること、自力で行動することが求められた。

第7原則は、献身の原則である。教育の本質は子どもを守り、これに仕えることであり、無私の気持ちで子どもに接することがめざされた。

以上が1923年にまとめられたタマンシスワ原則の要旨であるが、前年の設立趣意との明らかな連続性を認めることができる。1922年時点でうたわれた7項目をタマンシスワの原則として整理するための操作がこの間になされたといつてよい。タマンシスワの根本原理である自然の本質的な力の原則と自由の原則が第一、第二の原則としてあげられている。

タマンシスワ7原則は、1930年のタマンシスワ会議において「タマンシスワの名が用いられ続ける限り、変更されることのない」原則として採択された。しかし、インドネシアが独立を達成した後において、パンチャダルマ(Pancadharma)と称される原則が1947年12月に開かれた第5回タマンシスワ全国大会によって採択されるようになった。パンチャとは数字の5をさし、パンチャダルマは、つぎの5原則からなる[Dewantara 1952: 49-51]。

第1原則 Kodrat alam 自然の本質的な力の原則

第2原則 Kemerdekaan 自由の原則

第3原則 Kebudayaan 文化の原則

第4原則 Kebangsaan 民族の原則

第5原則 Kemanusiaan 人道の原則

第1原則から第3原則までは、タマンシスワ創設期に出されたタマンシスワ7原則のそれと一致する。第4原則と第5原則は、明らかにインドネシアの建国五原理パンチャシラの第3原理と第2原理を考慮して設定されたものである。しかし、ただ単にパンチャシラを模倣しただけでなく、タマンシスワ7原則のなかにすでに民族の原則、人道の原則に連なる理念がすでに

あったとタマンシスワ指導部は説明している [Tauchid and Suratman 1988: 30]。7原則のなかの民主主義の原則がパンチャダルマの民族の原則と関連する一方、献身の原則はパンチャダルマの人道の原則と深くかかわるという説明である。

他方、タマンシスワ7原則にあった非協力の原則と自助の原則がパンチャダルマでは採用されなかった理由は明解に記されている。オランダ植民地政府に対する非協力および自助の精神は、インドネシアが独立を達成した時点で必要がなくなり、むしろインドネシア政府に対して協力する原則が求められることとなった。

このように、「タマンシスワの名が用いられ続ける限り、変更されることのない」原則は、簡単に変更した。インドネシアが独立を達成したことによって、対抗すべき体制が協力すべき体制へと転換をとげたためである。

なお、インドネシアの独立によって、キ・ハジャル・デワントロは、短期間ではあったが初代の教育文化大臣に就任した。教育文化大臣を退任の後、デワントロは、教育研究者委員会さらには教育基本法案作成委員会の各委員長を務めた。デワントロは、インドネシアの独立後における文部行政の中枢にいたわけであるが、そのことは、タマンシスワの教育理念がインドネシアの国民教育における基盤の一部をなしたことを意味する。逆に言えば、国民教育の大きな潮流がタマンシスワという一私立教育機関に深く浸透していったことを意味する。ここに、タマンシスワがインドネシア独立のなかで創設以来守ってきた原則を自らの意志で変更した経緯を認めることができる。

III パンチャダルマとパンチャシラ

1965年のいわゆる「9月30日事件」は、インドネシア現代史における最大の分水嶺である。スカルノ政権からスハルト政権へと転換する契機となったこの事件は、タマンシスワにおいても、その存続を左右する重要な意味を持つようになった。容共の姿勢をとったスカルノから反共イデオロギーを打ち出そうとするスハルトへ政権が移譲されたこの時期は、共産党との関係が取りざたされたタマンシスワにとって、危機に瀕する時期であった。タマンシスワが掲げる教育理念をめぐるさまざまな論議が巻き起こった。とりわけ、パンチャダルマとインドネシアの建国五原則であるパンチャシラとの整合をめぐる問題がタマンシスワに突きつけられた。

パンチャシラとは、インドネシア独立前夜の1945年6月に開かれた独立準備調査会におけるスカルノの演説「パンチャシラの誕生」によって生まれ、憲法の前文にうたわれたインドネシアの国是であり、次の5原理からなる。

第1原理 Ketuhanan Yang Maha Esa 唯一神への信仰

第2原理 Kemanusiaan yang adil dan beradab 公平で文化的な人道主義

第3原理 Persatuan Indonesia インドネシアの統一

第4原理 Kerakyatan yang dipimpin oleh hikmat/kebijaksanaan dalam permusyawaratan dan perwakilan 協議と代表制において英知によって導かれる民主主義

第5原理 Keadilan sosial bagi seluruh rakyat Indonesia すべてのインドネシア国民に対する社会正義

タマンシスワは、その創設以来、宗教性の有無に関して、さまざまな批判が寄せられていた。創立の当初より、イスラーム諸団体から、タマンシスワは宗教性を保持していない、あるいは、反イスラーム的な性格を有しているといった非難がなされた。そうした批判は、9月30日事件が引き金となって再熱した。1967年には、「国民教育の日」がデワントロの誕生日である5月2日であることに対する反対運動が起こった[土屋 1987: 159]。デワントロが民族教育を興した唯一の英雄ではないとする批判が集まったのであるが、その背景には、タマンシスワが創設以来、宗教性を保持していないとする不信感が根強く残っていた[Tauchid 1968: 5-13]。

「国民教育の日」をデワントロの誕生日にすることへの反対運動は、タマンシスワの反論があって沈静化するようにみえた。しかし、1970年代初めにタマンシスワに対する批判は、再び起こった。争点の中心となったのは、パンチャダルマそのものに信仰性に関する言及がないとするものであった。それと関連して、タマンシスワの教育において宗教が重視されていないとする批判があった。

こうした一連のタマンシスワ批判に対し、タマンシスワ指導部は、自らの存続をかけて反論した。当時のタマンシスワ指導部において中心的役割を果たしていたタウヒド(Ki Mohamad Tauchid)とスラットマン(Ki Suratman)の論文を参照しながら、パンチャシラとパンチャダルマの関係を考えてみよう。

タウヒドは、1971年12月23日におけるタマンシスワ第11回大会の閉会式で行った演説「タマンシスワの闘争を続ける」(Melanjutkan perjuangan Tamansiswa)のなかで、タマンシスワに寄せられた一連の批判への反論を行った。タマンシスワが宗教性を保持しておらず、パンチャシラの第1原理である唯一神への信仰と整合しないとする批判に対して、パンチャダルマにおける自然の本質的な力の原則を取りあげ、自然の力とは、神がその創造物である人間に与えた性質であることを示し、タマンシスワの教育理念そのものにすでに宗教性が強く打ち出されていると反論した。タマンシスワが反イスラーム的な性格を有しているとする批判に対しては、タマンシスワの会員には、創設以来、ファハルディン(Fachruddin)やアグス・サリム(Agus Salim)など、ムハマディヤやサレカット・イスラームのメンバーが含まれていることを示し、批判が正当でないと訴えた[Tauchid and Suratman 1988: 15]。

スラットマンが発表した三部作の論文は、パンチャダルマとパンチャシラの比較を中軸とし

て、タマンシスワの教育理念がパンチャシラと整合することを明らかにしたものであった。

第一の論文「パンチャダルマとパンチャシラの人間類型」(Candra manusia Pancadarma dan Pancasila) は、標題の通り、人間類型を提示することによって、パンチャダルマとパンチャシラの共通性を導き出そうとするものである。それによれば、人間には、独立する特性と依存する特性をあわせもつ。独立的な特性とは、パンチャダルマの自由の原則と結びつくものである。一方、依存的な特性には、神に対する依存と人間に対する依存がある。それぞれが宗教的人間、社会的人間という類型にあてはまる。パンチャダルマの原則との関連でいえば、宗教的人間が自然の本質的な力の原則を具現したものであることを明示し、パンチャダルマそのものにパンチャシラの第1原理である唯一神への信仰の精神が盛り込まれていることを示した。このほか、文化的人間、人道的精神を有する人間、民族的精神を有する人間を設定し、パンチャダルマの5原則に適応した人間類型を提示している。スラットマンの第一論文で特に強調されていることは、自然の本質的な力の原則が単に宗教的人間と結びついているだけでなく、あらゆる人間類型は神のもたらした力によって定められていると明示したことである[*ibid.* : 28]。

こうした人間類型に基づいて、パンチャシラとパンチャダルマの比較論が展開された。スラットマンは、両者の共通点とともに、相違点も明らかにしている。パンチャダルマが1922年のタマンシスワ原則を結晶化させた理念であり、タマンシスワの価値体系、運動方針を表すのに対し、パンチャシラはインドネシアの建国原理であり、国民生活の指針であり、両者が本質的に次元の異なるものであることをまず示した。そのうえで、パンチャシラとパンチャダルマの原理を並べ、共通する項目と共通しない項目をあげた。共通する項目としては、パンチャシラの第1原理である唯一神への信仰とパンチャダルマの自然の本質的な力の原則、パンチャシラの第2原理である人道主義とパンチャダルマの人道の原則、パンチャシラの第3原理であるインドネシアの統一とパンチャダルマの民族の原則の三点である。唯一神への信仰の原理と自然の本質的な力の原則が結びつくとする論理は、すでに述べたとおり、神の恩恵としての自然の力という意味づけがなされることによる。

共通しない項目としては、パンチャシラの場合は、民主主義の原理、社会正義の原理、パンチャダルマの場合は、人道の原則、文化の原則があげられた。スラットマンの論によれば、タマンシスワの共同体としての基盤には、民主主義、社会正義に対する理解があり、それが家族主義的な生活原理に反映されている。他方、自由の原則は、インドネシアが独立を達成した段階において、もはや国家原理に含まれる必要のないものとして扱われた。文化の原則は、インドネシア国民の生活全般にかかわるものであり、当然のこととして、パンチャシラ国家哲学に含まれているとの理解が示された。

このように、スラットマンは、パンチャダルマがパンチャシラと本質的に異なる性格のもの

でありながら、両者の間にいささかの対立も生じないことを示した。そのうえで、パンチャダルマの原則がインドネシアの国家開発と連動した国民教育の開発において、重要な指針となることを表したのである。

第二論文には、「パンチャダルマの教育原理によるインドネシア国民におけるパンチャシラ道德の形成」(Dengan dasar pendidikan Pancadarma membina moral Pancasila bangsa Indonesia) という標題がついている。その内容は、第一論文「パンチャダルマとパンチャシラの人間類型」と重複する部分が多い。ここでも、人間類型が示され、それに基づいてパンチャシラとパンチャダルマの比較論が展開されている。

第二論文で注目されることは、パンチャシラとパンチャダルマの共通点を強調するにとどまらず、タマンシスワで創設以来実施されてきた教育原理をタマンシスワの外の社会においても適用することを示唆していることである [ibid. : 44-45]。この論文が発表された1975年は、インドネシアの小学校、中学校、高等学校でカリキュラムが改訂され、新たに「パンチャシラ道德教育」(Pendidikan Moral Pancasila) という教科が導入された年である。タマンシスワにおいては、タマンシスワ第12回大会において、教育文化省が開発した新しいカリキュラムを実施するとともに、タマンシスワ独自の「タマンシスワ教育」(Pendidikan Ketamansiswaan) を実施することが提唱された。

第三論文は、「パンチャシラ社会を創設するタマンシスワ大家族の任務」(Kerjaduta keluarga besar Tamansiswa menciptakan masyarakat Tamansiswa) と題し、タマンシスワの国家開発とりわけパンチャシラ精神を具現する人間の開発に対する積極的な姿勢が示された。この論文も、基本的には、これまでの二つの論文と同一の趣旨である。パンチャダルマとパンチャシラの整合性が説かれ、なかでも、パンチャダルマにおける自然の本質的な力がパンチャシラの第1原理でうたわれている唯一神の力の表明であることが力説された。パンチャダルマは、安寧で秩序ある社会を創出するための理念であり、パンチャシラと矛盾するどころか、パンチャシラを全面的に支持するものであることが示された。

第三論文では、1973年に開かれたアモン制度のセミナーが紹介されるとともに、1976年末に開催されたタマンシスワ最高会議において、国民教育においてアモン制度が実施される意義が論議された。プラムカ(ボーイスカウト、ガールスカウト)、青少年組織、さらには国軍などの指導者養成において、アモン制度を初めとするタマンシスワの教育理念が用いられることが明らかにされ、タマンシスワがパンチャシラ社会を創出する一翼を担っていることをスラットマンは強調した [ibid. : 50-51]。

以上、「9月30日事件」の後、共産党との関係、反イスラーム的性格などを理由にタマンシスワが批判にさらされた際、タマンシスワがどのような対応を行ったかを見てきた。当初、イスラーム的性格の保持、宗教の尊重をいささか受け身的に反論し、批判をかわしてきたタマン

シスワの指導部が、やがて、パンチャシラ社会を建設するうえでタマンシスワが演じる積極的で指導的な役割を力説するようになった。タマンシスワは、第三の荒波を乗り越えただけでなく、その機を巧みに捉えて、国民教育の開発における主導権を再び握ろうとしたのである。

お わ り に

タマンシスワは、インドネシア民族主義に根ざす教育機関として創設されて以来、さまざまな危機的状況に直面し、その都度自らの存続をかけた対応を迫られた。あるときには設立の原則に変更を加え、あるときには原則の解釈を改めながら、生き残りを図った。オランダ植民地時代、スカルノ体制期、スハルト体制期と時代が激しく移り変わるなかであって、民族主義教育の光を絶やすことなく今日に至った背景には、そうした努力があった。時代の流れに逆らわないだけではなく、時代の行く末を見極め、民族教育さらには国民教育の先導者となる積極的な姿勢が認められた。ときには創設時の原則を固持し、ときには変更を重ねたが、こうした強靱性と柔軟性がタマンシスワに変わることなくインドネシアの教育における模範としての位置づけを与える要因となったと考えられる。

タマンシスワの新たな展開として注目されるものにタルナ・ヌサントラ高等学校（SMA Taruna Nusantara）の創設がある。土屋健治のタマンシスワ研究の最後をなす論文に「タルナ・ヌサントラ高等学校の設立」がある。タルナ・ヌサントラ高等学校は、タマンシスワが国軍の協力の下で1990年に設けたインドネシアにおける指導者を養成するための機関である〔Soenarno 1992:289〕。タマンシスワの原理に基づき、国軍に支援されたこの教育事業は、まさにパンディットの要素とクシャトリア的要素を合わせ持ったものであるといえる。タルナ・ヌサントラ高等学校がめざす理想的な人物像とは、国民教育の父であるデワントロと国軍の父であるスディルマンの合一である。タマンシスワがその創設以来めざしてきた教育の理念とは、まさにパンディットとクシャトリアとの一体化であったが、その理想がタルナ・ヌサントラ高等学校の設立によって結実されることが期待されている。

ところで、タマンシスワは私立の教育機関である。オランダ植民地時代に植民地政府立の学校に対抗する制度として誕生したタマンシスワは、独立後、インドネシア政府と一定の関係を保ちながら私立学校として維持継承されてきた。私立学校であるタマンシスワが創設以来保持されてきた教育の理念が国家との関係でさらに国民育成との関係でどのように変化していくのか、タルナ・ヌサントラ高等学校設立後における方向性が注目される。

引用文献

- Dewantara, Ki Hadjar. 1952. Azas-azas dan Dasar-dasar Taman Siswa. In *Buku Peringatan Taman Siswa 30 Tahun*.
- Majelis Luhur Taman Siswa. 1952. *Buku Peringatan Taman Siswa 30 Tahun, 1922-1952*. Yogyakarta.
- _____. 1992. *Buku Peringatan Tamansiswa 70 Tahun, 1922-1992*. Yogyakarta.
- Nishimura, Shigeo. 1995. The Development of Pancasila Moral Education in Indonesia. *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 33 (3).
- Sajoga. 1952. Riwayat Perjuangan Taman Siswa, 1922-1952. In *Buku Peringatan Taman Siswa 30 Tahun*.
- Soenarno. 1992. Perguruan Taman Taruna Nusantara. In *Buku Peringatan 70 Tahun Tamansiswa*.
- Suratman. 1988a. Candra Manusia Pancadarma dan Pancasila. In *Tamansiswa dan Sila Ketuhanan Yang Maha Esa*.
- _____. 1988b. Dengan Dasar Pendidikan Pancadarma membina Moral Pancasila Bangsa Indonesia. In *Tamansiswa dan Ketuhanan Yang Maha Esa*.
- _____. 1988c. Kerjaduta Keluarga Besar Tamansiswa menciptakan Masyarakat Pancasila. In *Tamansiswa dan Ketuhanan Yang Maha Esa*.
- Tauchid, Mohamad, ed. 1968. *Ki Hadjar Dewantara, Pahlawan dan Pelopor Pendidikan Nasional*. Yogyakarta: Majelis Luhur Persatuan Taman Siswa.
- _____. 1988. Tamansiswa dan Sila Ketuhanan. In *Tamansiswa dan Sila Ketuhanan Yang Maha Esa*.
- Tauchid, Mohamad; and Suratman. 1988. *Tamansiswa dan Sila Ketuhanan Yang Maha Esa*. Yogyakarta: Majelis Luhur Persatuan Tamansiswa.
- Team Penyusun Bahtera Jaya. 1985. *Album 86 Pahlawan Nasional*. Jakarta: Bahtera Jaya.
- 土屋健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開——』東京：創文社.
- _____. 1987. 「タマン・シスワとインドネシア現代政治——『9月30日事件』への対応をめぐって」『東南アジア研究』25 (3).
- _____. 1995. 「タルナ・ヌサンタラ高等学校の設立」『日本とアジア』平野健一郎（編）東京：原書房.
- Tsuchiya, Kenji. 1988. *Democracy and Leadership: The Rise of Taman Siswa Movement in Indonesia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- _____. 1992. *Demokrasi dan Kepemimpinan: Kebangkitan Gerakan Taman Siswa*. Jakarta: Balai Pustaka.